

# 東洋文庫所蔵本に押捺された蔵書印について（十五）

—政治家・官僚の蔵書印—

中善寺 慎

## 既刊連載目次

- 一 朝鮮本に押捺された朝鮮の蔵書家の蔵書印 書報 35号
- 二 僧侶・寺院の蔵書印、附神官・神社の蔵書印（上） 書報 36号
- 三 僧侶・寺院の蔵書印、附神官・神社の蔵書印（下） 書報 37号
- 四 国学者の蔵書印（上） 書報 38号
- 五 国学者の蔵書印（下） 書報 39号
- 六 漢学者・漢詩人の蔵書印 書報 40号
- 七 学校・教育機関の蔵書印 書報 41号
- 八 医家・本草家の蔵書印 書報 42号
- 九 大名・藩主とその家の蔵書印 書報 43号
- 十 幕臣・藩士の蔵書印 書報 44号

- 十一 戯作者・操觚者・新聞社の蔵書印 書報45号
- 十二 商賈・実業家・企業の蔵書印 書報46号
- 十三 近代の学者・教授の蔵書印 書報47号
- 十四 図書館・博物館とその周辺の蔵書印 書報48号

## 凡 例

- ・ 印影は縮尺任意の単色写真である。
- ・ 印文の縦の寸法をミリメートルの数字で掲げた。
- ・ 複数の資料に該当蔵書印を見い出せるものは、印影を採集した資料名に\*印を付した。
- ・ 資料名につづけて、請求記号を丸括弧に包んで付した。
- ・ 蔵書家の伝記などは主として次の資料に依った。
  - 市古貞次「ほか」編『国書人名辞典』
  - 井上宗雄「ほか」編『日本古典籍書誌学辞典』
  - 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』
  - 国立国会図書館編『人と蔵書と蔵書印』
  - 平凡社編『日本人名大事典』
- ・ 配列は、印記所有者のよみの五十音順とした。

青木信寅（一八三五—一八八六）

明治期の司法官。天保六年（一八三五）尾張国愛知郡名古屋に生まれる。姓は源。旧称斎宮、また、左源次と称す。刑法官権判事・刑部大丞・大審院首席判事などを歴任。明治十五年函館控訴裁判所判事長に任ぜられる。明治十九年（一八八六）没。古筆了仲に鑑定を学び古典籍の善本を収集。古写本を中心とする旧蔵書は、没後に静嘉堂文庫の購入するところとなった。

東洋文庫で確認されている蔵書印は、いずれも四角い紙片に捺され資料に貼付されている。

「青木印」（34）『緒阿闍梨真言密教部類総録』（一—B—二）

『逸号年表』（三—H—a—ほ—二三）

『胎藏界真言』（二〇—一—二三）

『大随求陀羅尼』（二〇—一—二六）

『大仏頂陀羅尼』（二〇—一—二八）

『仏眼真言』（二〇—一—三二）

『悉曇章』（二〇—九—五五）

『悉曇体文』（二〇—九—五六）

\* 『悉曇略記』（二〇—九—五七）



秋山不羈齋（一八三九—一九二一）

明治期の教育者。名は恒太郎。号は不羈齋。天保十年（一八三九）生まれ。長岡藩の儒臣で崇徳館教授秋山景山の長孫。

明治二年（一八六九）福沢諭吉の私塾に入り洋学を学ぶ。慶応義塾や松山英学校の教師を歴任。その後、文部省に出仕し、出版課長を経て長崎師範学校校長に転任。東京師範学校校長を務めるなど教育界で活躍した。明治四十四年（一九一一）没。



『新編柳樽』『俳風柳多留』は寺田望南旧蔵書。

〔秋山〕（22）

〔白石詩草〕（VII-四-B-一四一）

〔御大法百箇條〕（XII-三-D-c-四八）

〔不羈齋図書記〕（26）\* 〔新編柳樽〕（VII-二-L-一〇一一）

〔俳風柳多留〕（VII-二-L-一〇一二）

〔吉原細見〕（VII-二-O-一六）

〔異人恐怖伝〕（X-五-F-一〇〇八）

〔刻異人恐怖伝論〕（X-五-F-一〇〇八）

〔御大法百箇條〕（XII-三-D-c-四八）



### 阿部弘藏

明治期の官吏。一橋徳川家家臣の家に生まれる。生没年不詳。名は弘国、字は弘藏、幼名は二郎。のちに杖策と改称する。号は槐陰。幼時より読書を好み、儒を小橋橋陰に、和歌を井上文雄に学び、開成所に入学し英語学・航海学を修めた。慶応二年（一八六六）砲兵差図役並を務める。慶応四年（一八六八）彰義隊の結成に参加。明治維新後は文部省に出仕し、著作に『日本奴隸史』『漢字伝来考』『寛永寺建碑始末』等がある。

『漢字伝来考』は中山久四郎旧蔵書。

「阿部弘藏図書之記」(35)

『博物館書目解題略』(Ⅱ-1-1A-1008)

\* 『漢字伝来考』(Ⅷ-5B-1001)

蟻川五郎作（一八六六一—一九四六）

明治期から昭和期の軍人。慶応二年（一八六六）信濃国下高井郡夜間瀬村に生まれる。明治二十四年（一八九一）陸軍大学校卒業。大正四年（一九一五）陸軍少将となる。松本連隊長・近衛歩兵第三連隊連隊長・歩兵第八旅団長等を歴任。退役後の大正十三年、第十五回衆議院議員総選挙に長野県第四区から出馬して当選。帝国飛行協会理事も務め、「都市と飛行場」等の著作がある。昭和二十一年（一九四六）没。平成二十三年（二〇一一）旧蔵書九一三冊が東洋文庫に寄贈された。地元の山ノ内町にも旧蔵書を収める町立蟻川図書館がある。

〔蟻川（大）〕（13）

〔四書五経増補文選字引〕（I—18—A—18—18）

〔蟻川（中）〕（7） 〔十八史略字引大全〕（II—4—18—11）

\* 〔纂評唐宋八家文読本〕（IV—1—19—02）ほか

〔蟻川（小）〕（6） 〔標註文選〕（IV—4—18—06）

〔蟻川五堂蔵書〕（35）

\* 〔唐詩三百首註疏〕（IV—1—4—02）

〔掌中歴代詩学自在〕（VII—4—D—1—02—06）

〔五郎〕（9） 〔標点音儀三体詩約註〕（IV—1—19—04）

\* 〔皇朝大家人物論〕（X—5—L—1—09—06）

〔五郎作〕（13） 〔大学中庸孟子論語〕（I—18—A—18—15）

\* 〔朝鮮史〕（X—5—M—1—00—04）ほか





犬養木堂（一八五五—一九三二）

明治期から昭和期の政治家。安政二年（一八五五）備中国庭瀬藩の郷士源左衛門の次男として生まれる。名は毅。通称は仙次郎。号は木堂。幼時より漢字を学び長じて英学を修める。上京して共慣義塾を経て、明治九年（一八七六）慶応義塾に入學（のち中退）。「郵便報知新聞」「朝野新聞」記者の傍ら大隈重信の謀將を務める。明治二十三年の第一回総選挙から十八回連続して代議士に当選、四十二年間にわたって衆議院に議席を保持した。明治二十九年進歩党の結成に参加。憲政党、憲政本党、立憲国民党総理、政友会のうち、大正十一年（一九二二）革新倶楽部党主となり、護憲運動・普通選挙運動を推進した。通信大臣を歴任したのち一時引退するが、昭和四年（一九二九）政友会総裁、昭和六年に内閣総理大臣兼外務大臣となる。翌七年（一九三二）五・一五事件に遭い射殺される。墓所は東京青山墓地。「憲政の神様」と称される一方、漢詩文や書にも長じ、文人として内外に重んじられた。著書に『木堂先生韻語』がある。掲出書は吉田東伍旧蔵書。

「犬養氏図書」（30）

『新羅国故尚朝国師教諡朗空大師白月栖雲之塔碑銘』

（XI—四—B—二四）

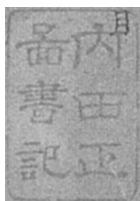
内田正（一八四九—一九二九）

明治期の陸軍軍医。嘉永二年（一八四九）内田貞二（乾隈）の子に生まれる。旧名正太郎。静岡県土族。藩校克明館に学び、陸軍軍医正となり、のち浜松新町で父業を継ぐ。明治十一年（一八七八）勲五等を叙賜。明治十三年名古屋鎮台勤務となり、往診課長。明治十六年には遠江私立衛生会を結成した。浜松町名誉町長。浜松医会会長、浜松軍人会の会長も務める。昭和四年（一九二九）没。著書に『儒家哲学本義』等がある。

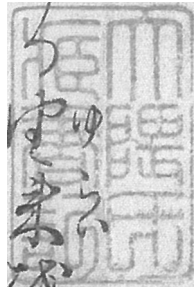
掲出書は開国百年記念文化事業会収集資料のひとつ。

『内田正図書記』（25）

『勲位録』（XII 三―B―b―四五）







大隈重信（一八三八—一九二二）

明治・大正期の政治家、教育者。天保九年（一八三八）佐賀藩鉄砲組頭大隈信保の長男として肥前国佐賀城下の会所小路に生まれる。幼名は八太郎。藩校弘道館に漢学を学ぶ。安政二年（一八五五）蘭学寮に入り後にその教官となる。慶応四年（一八六八）に徴士参与職となり、外国事務判事・外国官副知事、ついで大蔵少輔・民部大輔・大蔵大輔を歴任。明治三年（一八七〇）参議。明治十五年には立憲改進黨を結成し、東京専門学校（のちの早稲田大学）を創立した。大蔵省事務総裁、外務大臣などを歴任し、明治三十一年日本最初の政党内閣と大正三年（一九一四）の二度にわたり内閣総理大臣を務める。大正十一年（一九二二）早稲田の自宅に病没。墓は、佐賀市与賀町の竜泰寺と東京都文京区の護国寺とにある。著書に『大隈伯昔日譚』『開国五十年史』等。在官中の管掌参画した官庁関係文書と書簡類は、早稲田大学図書館に収蔵される。

掲出書『暹羅経』は河口慧海の手を経て東洋文庫に収蔵されたもの。『文覚』は大野洒竹旧蔵書。

『大隈』（13）

『暹羅経』（PLIMS-1）

『大隈氏蔵書記』（36）

『文覚』（31Fia-115）



大槻如電（一八四五—一九三一）  
 明治・大正期の博学者。弘化二年（一八四五）仙台藩士大槻磐溪の次男として江戸に生まれる。諱は清修。字は念卿。通称は修二（次）・分。号は如電・玩古道人・活魚人・天笑子。家学を受け林家に学び、仙台藩校養賢堂で国学を修めた。養賢堂句読師から、藩の大番役勤仕・砲術指南役などを歴任。維新後は上京して、海軍兵学寮皇漢学教官を経て明治五年（一八七二）文部省に出仕し、字書取調掛として『新撰字書』編修などに従事した。明治七年に官を辞し、翌年には家督を弟の文彦に譲って、在野の学者として著述に専念。居所に因んでその蔵書を第五浅草文庫と称した。和漢洋学から邦楽・舞踊などにも通じ、博学奇行で知られる。昭和六年（一九三一）日暮里に病没、芝高輪の東禅寺に葬られる。洋学関係書が静嘉堂文庫に収蔵される。著書に『舞楽図説』『俗曲の由来』『駅路通』『新撰洋学年表』等がある。

『浅草文庫（方印）』（35）

『第五浅草文庫古板書目』（II展一—（二））

\* 『甲斐名勝志』（XI—五—C—九—）

『明和大火行』（三—H—a—八—四）

『新撰洋学年表』（X—一—一—一〇〇—五）

『大槻氏印』（35） 『明和大火行』（三—H—a—八—四）

『電』（10）



小沢圭次郎（一八四三—一九三二）

明治期の造園家。天保十三年（一八四三）桑名藩医小沢長庵の次男として生まれる。幼名は鯛三。のち圭齋・圭二郎。号は酔園・皆園・敬斎。芳野金陵に儒学を、箕作秋坪に英学を学ぶ。また医学と作詩に励む。維新後に上京。明治四年（一八七一）兵部省海軍兵学寮の教官となり、文部省に転じて字書取調掛を経て東京師範学校で教鞭を執る。明治十九年官を辞してからは造園活動と庭園史研究に専念し、晩年は東京府立園芸学校で庭園史を講じた。『園林叢書』編纂の企図は未完に終わる。昭和七年（一九三二）急性肺炎のために没す。蒐集した庭園関係の資料は明治二十七年の大火で多く灰燼に帰したが、絵図を中心とした旧蔵書が国立国会図書館に収蔵される。また、副校長として東京師範学校で収集した古版地誌類が、現在は筑波大学に引き継がれている。

「小沢文庫」（51）

『桜花聚品』（XV—三—B—b—一七）

川田甕江（一八三〇—一八九六）

幕末・明治期の漢学者。文政十三年（一八三〇）備中国浅口郡阿賀崎村の商人川田資嘉の次男として生まれる。名は剛・資兼。幼名は竹二（次）郎。字は毅卿。通称は城之助、城三郎、剛介。号は甕江、執斎、行雲流水書屋、百日紅園。早くに父母を亡くし伯父の維徳に養われる。藩士に推挙され、山田方谷・大橋訥菴に学ぶ。江戸邸の督学・監察となる。維新後は大学少博士に任ぜられ正七位に叙し東京府に転籍した。

明治十四年（一八八一）宮内省四等出仕、ついで大学教授を兼ねた。修史局編纂御用掛などを務め、博物館理事・貴族院議員・古事類苑編修総裁・宮中顧問官などを歴任。学士院会員、文学博士。明治二十九年（一八九六）没。墓は、東京駒込の吉祥寺。重野成斎・三島中洲と共に明治の三大文章家と称され、『近世名家文評』『文海指針』などの著書がある。掲出印は序文末に押された落款印である。

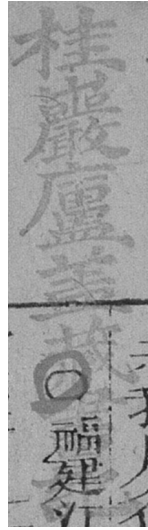


「毅卿」(19)

『朝鮮史』(X-五-M-b-1-0004)

「川田剛印」(19)

『朝鮮史』(X-五-M-b-1-0004)



衣笠豪谷（一八五〇—一八九七）

明治期の文人画家。嘉永三年（一八五〇）備中国窪屋郡倉敷の大橋弥助を父として生まれる。母方の姓である衣笠を用いる。名は緝侯。初名は悦次郎。ついで延太郎と改める。字は紳卿、号は豪谷・天柱山人・白樂村莊・五柳外史。書画を能くし兼ねて著述を好む。森田節斎・阪谷朗廬に経書を学ぶ。清国視察の後、明治九年（一八七六）勸農局に勤め解任を掌る。内務省・農商務省を歴任し、明治二十一年頃には農商務大臣官房にあった。明治二十五年辞官。明治三十年（一八九七）東京牛込中町に病没。東京の谷中墓地に葬られる。著書に『西泛帰録』など。

『衣笠氏消印記』（28）

『衣笠文庫』（18）

『桂巖廬蓋藏書記』（68）

『豪谷』（16）

『白樂村莊衣笠氏圖書』（33）

『烹茶樵書』（IX-1-21-13）

『乗楂日記』（XI-6-B-d-24）

『示威周行』（II-1-1-A-74）

『乗楂日記』（XI-6-B-d-24）

『示威周行』（II-1-1-A-74）

\* 『示威周行』（II-1-1-A-74）

『烹茶樵書』（IX-1-21-13）

『乗楂日記』（XI-6-B-d-24）

久米幹文（一八二八—一八九四）

幕末・明治期の国学者。文政十一年（一八二八）水戸藩土川幹忠の三男として常陸国茨城郡水戸に生まれる。のち久米博慎の養嗣子となる。名は幹文。字は公斐。通称は幸三郎・孝三郎。号は水廼舎・水屋・桑園。本居内遠・平田鉄胤に学ぶ。慶応元年（一八六五）弘道館訓導。国事に奔走するが藩に幽閉される。維新後は教部省に出仕し諸社の宮司を歴任。明治十五年（一八八二）東京大学講師、ついで第一高等中学校教授となる。漢詩文や和歌に長じ、能書家としても知られる。大八洲学会会主となり、古典派歌人として重きをなした。明治二十七年（一八九四）没。墓は東京染井墓地にある。著書に『大八洲史』、歌集『水屋集』などがある。

「久米氏水屋記」（37） 『類従三代格』（三一―I―a―二〇）







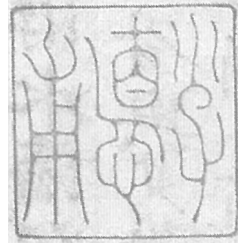
高麗環

明治期の官吏。伝未詳。明治三年（一八七〇）外務省文書司  
少令史。

「高麗蔵」（30）

『三縁山志』（IV―四―D―七二）





重野安齋（一八二七—一九一〇）

明治期の漢学者。文政十年（一八二七）重野太兵衛の子として薩摩国鹿兒島郡阪元村に生まれる。名は安齋。字は子徳（士徳）。通称は厚之丞。号は成斎・隼所・竜泉・未斎。藩校造士館に学ぶ。嘉永元年（一八四八）江戸に遊学し、昌平黌で安積良斎、塩谷宕陰、安井息軒らの教えを受ける。帰藩後は造士館で訓導・助教を務めた。安政四年（一八五七）には奄美大島に流謫。明治四年（一八七一）上京して文部省に出仕し、太政官に転じて修史局副局長や修史官編修長などを歴任した。明治二十一年帝国大学文科大学教授となり国史科を創設する。抹殺博士の異名を持ち、実証的方法を用いて日本史の研究に新生面を開いた。明治二十三年貴族院議員。漢詩文家としても活躍した。明治四十三年（一九一〇）東京市牛込区の自宅に没す。東京谷中墓地に葬られる。著書に『国史総覧稿』『成斎文集』などがある。

掲出の印は「尊攘紀事叙」の首尾に押された落款印である。

〔子徳甫〕（31）

『尊攘紀事』（E一二〇五八〇オカ〇一〇〇二）

〔成斎〕（15）

『尊攘紀事』（E一二〇五八〇オカ〇一〇〇二）

〔重野安齋〕（31）

『尊攘紀事』（E一二〇五八〇オカ〇一〇〇二）

陸軍士官学校 陸軍歩兵大尉 鈴木万太郎



鈴木万太郎(？—一九二九)

明治・大正期の軍人。生年不詳。香川県仲多度郡滝川村の出身。陸軍士官学校の歩兵科に学び、明治三十九年(一九〇六)補歩兵第四三連隊付歩兵少尉として任官。明治四十二年より満洲に駐屯し、明治四十四年から中国語研究のため北京に留学する。大正元年(一九一二)二葉荘に学び、大正五年(一九一六)陸軍委託学生として東京外国語学校蒙古学科にてモンゴル語を専攻する。シベリア勤務の後、大正十年陸軍砲工学校の中国語教官を務め、大正十四年予備役に編入される。昭和四年(一九二九)脳溢血のため死去。日頃からモンゴル語辞典の編纂作業に努め、職を退いた後にも陸軍嘱託として編纂を続けた。その成果は没後『蒙古語大辞典』の刊行に結実する。

東洋文庫に寄贈された鈴江旧蔵モンゴル関係資料は四百件前後。『蒙古文範』(Ⅷ―Ⅷ―Ⅷ)には「寄贈／大正十二年四月鈴木万太郎」の墨書があるので、寄贈の時期はこの頃と思われるが、正確な寄贈時期や経緯などは不明である。『東洋文庫書報』四〇号に青木雅浩「東洋文庫所蔵鈴江萬太郎寄贈図書について」がある。

〔陸軍歩兵大尉鈴木万太郎〕(53)

〔Ariuksan apostol ut un toguji〕(MOR—154)

〔鈴江〕(9)

〔蒙古語研究〕(Ⅷ―Ⅷ―11)

〔鈴江蔵書番号〕(37)

〔蒙文読本〕(MOL—11)

〔Grammatik der mongolischen Sprache〕(V—B—91—69)

\*〔倉頡篇校註〕(I—9—B—11)

〔中華全国名勝古蹟大観続編分冊〕(II—1—F—1—003)

〔重刊老乞大〕(Ⅶ—1—1—001)ほか

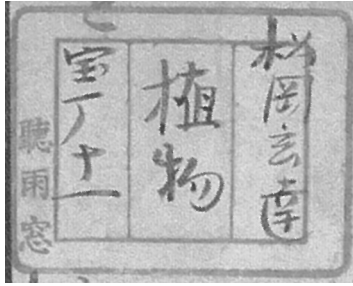


砂田重政（一八八四—一九五七）

大正・昭和期の政治家。明治十七年（一八八四）愛媛県越智郡蔵敷村に士族砂田重治の長男として生まれる。苦学の末、明治三十七年東京法学院大学（のちの中央大学）法律科卒業。司法官試補を経て神戸市などで弁護士を開業した。大正八年（一九一九）には政界に転じ、衆議院議員に当選十回。犬養内閣の農林政務次官、第二次鳩山内閣の国務大臣・防衛庁長官を務めた。昭和十七年（一九四二）代議士を辞任し南方総軍軍政顧問となり、シンガポールに従軍した。第二次大戦後、一時公職を追放されたが昭和二十七年政界に復帰。立憲政友会政務調査会長、政友会幹事長、自由党総務、自由民主党総務会長を歴任した。昭和三十二年（一九五七）東京都大田区の長男宅で心臓麻痺により死去。

「弁護士砂田重政事務所之印」（38）

『本邦新聞史』（II—1—E—1—077）



角田竹冷（一八五六—一九一九）

明治・大正期の俳人。安政三年（一八五六）駿河国富士郡の生まれ。名は真平。号は竹冷・聴雨窓・閑々人。幼少時より俳句に親しむ。明治五年（一八八二）上京して沼間守一に学び、明治十三年に代言人となる。その後東京市議等を経て政界に入り、衆議院議員、東京都水道局長、東京株式取引所理事などを歴任した。明治二十八年（一八九五）尾崎紅葉らと秋声会を結成。明治三十六年『卯杖』を創刊・主宰し、俳諧史研究や古俳書収集にも努めた。『聴雨窓俳話』等の著書がある。大正八年（一九一九）没。昭和七年（一九三二）旧蔵書は東京帝国大学に寄贈され、総合図書館に竹冷文庫として現存する。

〔竹冷挿架〕（60） \* 『子供早学問』ほか（VI―六一〇）

『菅原詣』ほか（VII―二二一―一八）

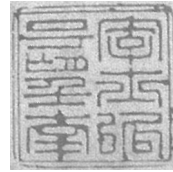
『江島詣文章』ほか（VII―二二一―一九）

『菅丞相御製十二月往来』ほか（VII―二二一―二〇）

『怡顔齋菌品』（XV―三―B―b―八六）

〔聴雨窓〕（35） 『江戸町々いろは分独案内』（VI―六一〇）

\* 『怡顔齋菌品』（XV―三―B―b―八六）



寺田望南(一八四八—一九二九)

明治期の官吏。嘉永元年(一八四八)薩摩国に生まれる。本姓は平氏。名は弘。盛業とも称した。字は士弘。号は望南・読杜草堂・静節山房。明治九年(一八七六)文部省督学局少視学。その後、一時仏門に入り還俗する。以降は官途につかず、古書の売買・仲介で生計をたてていたという。自らの所有する書籍以外にも蔵書印を勝手に捺す癖があった。昭和四年(一九二九)没す。

掲出書のうち、『白雲集』は小田切万寿之助の、『標題句解孔子家語』は上田万年の、『称謂私言』は中山久二郎の旧蔵書である。

〔薩摩国鹿兒島郡寺田盛業蔵書記〕(42)

〔字士弘号望南〕(21) \* 〔新編柳樽〕(VII-1-1-101-1)

〔俳風柳多留〕(VII-1-1-101-2)

〔寺田盛業〕(21) \* 〔新編柳樽〕(VII-1-1-101-1)

〔俳風柳多留〕(VII-1-1-101-2)

〔論語集解〕(2-C-a-4)

〔論語集解〕(2-C-a-4)

〔論語集解〕(2-C-a-4)

〔天下無双〕(21) \* 〔東京溜池靈南街第六号読杜草堂主人寺田盛業印記〕(30)

〔読杜草堂〕(16) \* 〔俳風柳多留〕(VII-1-1-101-2) ほか

〔読杜草堂(陰文)〕(19) 〔論語集解〕(2-C-a-4)

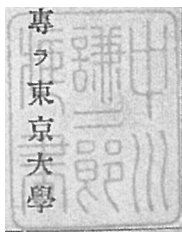
中川謙二郎（一八五〇—一九二八）

明治・大正期の教育家。嘉永三年（一八五〇）丹波国南桑田郡馬路村に中川重賢の末男として生まれる。諱は重雄。幼名は捨次郎、後に城之介と称す。維新後上京し、東京開成所、共立学舎、東京開成学校などに学ぶ。明治九年（一八七六）新潟学校の教師となり、学習院、東京女子師範学校などで教諭、東京工業学校、高等師範学校で教授を歴任した。明治三十二年に文部省視学官を兼任のち専任。仙台高等工業学校、東京女子高等師範学校の校長となり、大正六年（一九一七）辞職退官した。昭和三年（一九二八）没す。女子教育に力を尽くし、著書に『婦人の力と帝国の将来』などがある。

〔中川〕（7）

『本邦金石略誌』（XV—III—B—d—4）

〔中川謙二郎蔵書〕（28）『本邦金石略誌』（XV—III—B—d—4）



永田安吉（一八八八—？）

昭和戦前期の官吏。明治二十一年（一八八八）永田与三吉の次男として兵庫県に生まれる。大正四年（一九一五）東京帝国大学独法科を卒業し、千葉県属同理事官を経て外務事務官補兼外務書記官。臨時調査部条約局第三課、臨時平和条約事務局、国際連盟事務局事務官、パリ・スイス・チェコスロバキアの公使館書記官を歴任。昭和五年（一九三〇）フランス領インドシナのハノイに駐在総領事として赴任する。昭和九年調査部第一課長、昭和十二年駐仏大使館参事官となり退官する。没年不詳。インドシナ事情、特に歴史に精通し「佛領印度支那ニ就テ」「最近の佛領印度支那」等の講演記録がある。

ハノイ在勤時に収集した越南本五百余冊の東洋文庫への寄贈は、昭和九年のことである。また旧蔵のインドシナ関係文献と考古学資料が東京帝国大学に寄贈されている。

掲出書は、上記の越南本とは別に、昭和十五年に寄贈されたもの。



『永田蔵書』(18)

『安南志原』(XII-11-1004)

南摩綱紀（一八二三—一九〇九）

幕末・明治期の漢学者。文政六年（一八二三）会津藩士南摩綱雅の子として陸奥国北会津郡若松に生まれる。名は綱紀。

字は士張。通称は三郎・八之丞。号は羽峰。藩校日新館に学び学績良好。弘化四年（一八四七）江戸に出て昌平黉に経史百家を修め、また杉田成卿・石井密太郎らに洋学を学ぶ。安政二年（一八五五）藩命により関西諸州を歴訪。文久二年（一八六二）樺太島守備を命ぜられ蝦夷に留まること六年、慶応三年（一八六七）藩邸の学職となる。会津城陥落後は越後高田に禁錮される。京都府学職、太政官、文部省を経て、東京大学教授・高等師範学校教授などを歴任。著書に『内国史略』などがある。明治四十二年（一九〇九）委縮腎のため東京麹町区の自宅に病没する。墓は東京の谷中墓地。

大正四年（一九一五）東京高等師範学校に寄贈された旧蔵書コレクションが、筑波大学に引き継がれ現存する。



『羽峰書屋蔵記』（29） 『内国史略』（X15-B1-054）

『南摩綱紀』（8） 『史略』（三二H-a-i-10）



平出鏗二郎（一八六九—一九一一）

明治期の国文学者。明治二年（一八六九）尾張国愛知郡名古屋城下の医家に生まれる。号は鏗痴、また、鳳簫譚史・今様むかし男・二山。愛知医覺出身。明治二十七年に東京帝国大学文科大学国文学科選科修了。翌年文部省に出仕し図書課勤務となる。文科大学史料編纂所員、臨時教員養成所教授、文部省編修官などを歴任。明治四十一年病により休職。祖父で尾張藩医の平出順益の代から蔵書家として知られ、中世小説の翻刻・校訂・解題に努める。明治四十四年（一九一一）没。蔵書は四散。著書に『近古小説解題』、遺稿『鏗痴集』などがある。



〔平出氏書室記〕（25） 『鏗痴雜綴』（II—A—1—027）

『源氏目録』（三—A—d—三八）

『庭訓抄』（三—A—d—四五）

『長恨歌』〔抄〕（三—A—e—三一）

『済民記』（三—A—j—七）

\* 『医略正誤』（三—A—j—八）

堀田正恒（一八八七—一九五一）

大正・昭和期の政治家。明治二十年（一八八七）子爵鍋島直柔の次男として東京の麻布に生まれる。幼名は直言。伯爵堀田正倫の養子となり、正恒と改める。大正四年（一九一五）東京帝国大学法科大学政治学科を経て、同大学大学院を修了する。貴族院議員、海軍参事官を歴任、昭和六年（一九三一）犬養毅内閣で海軍政務次官に就任する。大日本農会会頭となり、帝国農会特別議員を兼任する。戦後、東京農業大学理事などを勤めた。昭和二十六年（一九五一）没。大正十四年より千葉県立図書館に寄託されていた旧蔵書は、没後あらためて県立図書館に寄贈とされ、現存する。

「蔵書堀田氏之印」（30）『桃山人夜話』（VII-21-F-112）

『狂文宝合之記』（VII-21-M-12）

『千とせのためし』（IX-11-7\*）





前間恭作（一八六八—一九四一）

大正・昭和期の朝鮮語学者。慶応三年（一八六八）対馬府中藩の城下厳原に前間謙蔵の子として生まれる。明治二十四年（一八九二）慶応義塾を卒業。外務省の朝鮮留学募集に応じて朝鮮に渡り、明治二十七年仁川領事館書記生となる。漢城、シドニー勤務を経、公使館・総督府で経歴を重ね、総督府通訳官として総務部文書課勤務となる。明治四十四年に退官、以後は朝鮮文化の研究に専念する。昭和十七年（一九四二）福岡に没す。この間に蒐集された資料は、大正十三年と昭和十七年の二回にわたって東洋文庫に寄贈された。他に、書簡・日記などの私的資料が九州大学文学部朝鮮史研究室に在山楼文庫として収蔵されている。国立国会図書館にも数点の前間恭作旧蔵書があり「末遍満」印の押捺例も見られる。

「K. Mayema」印には、掲出印のように日付の併記されているものがあり、これにより資料入手の時期を推定することができる。また、『篇海類編』（一九一七）は、前間の蔵書印は押されていないものの、貼付の寄贈ラベルによって昭和二年五月二〇日に前間恭作から寄贈されたものとわかる。

「臙脂屋」（45）

\* 『新增東國輿地勝覽』（Ⅶ―1―1024）ほか

「恭」（3）

『大学諺解』（Ⅶ―1―144）

「在山楼蒐書之一」（49）

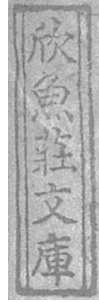
\* 『洪範直指』（Ⅶ―1―100）ほか



K. Mayema  
Jan. 29 1892



- 「前間」(7)  
 「前間藏記」(15)  
 \* 「大学諺解」(Ⅶ-1-144)  
 \* 「朝鮮寺刹史料」(Ⅳ-4-D-51)  
 「三国史記」(Ⅶ-2-101-18\*)  
 「三韓紀略」(X-5-M-a-18)  
 \* 「徴志録」(Ⅶ-2-180-3\*) ほか  
 \* 「徴志録」(Ⅶ-2-180-3\*) ほか  
 「K. Mayema」(5)



松井佳一（一八九一—一九七六）

大正・昭和期の水産学者。明治二十四年（一八九二）山口県都濃郡富田村に生まれる。大正三年（一九一四）農商務省水産講習所本科養殖科卒業。昭和九年（一九三四）農学博士。愛知県水産試験場、メキシコ共和国水産局顧問などを経て、農林省水産試験場技師となる。兵庫県水産試験場長、日本真珠研究所長、近畿大学教授などを歴任。金魚博士として知られ、金魚に関する文献や本草書を蒐集した。昭和五十一年（一九七六）没。著書に『金魚大鑑』『日本の金魚』など。宇部短期大学に水産学関係を中心とした旧蔵書が寄贈されており欣魚莊文庫として公開されている。また、周南市立新南陽図書館に旧蔵の毛利藩関係資料がある。

「欣魚莊文庫」（38）

『旅寝塚建立記念』古俳書展覧会陳列書解題』

（Ⅱ―展―）（二六二）

「佳一」（26）

『日本の金魚』（Ⅸ―二―）（一七）



松田本生（一八一四―？）

幕末・明治期の国学者。文化十一年（一八一四）因幡国邑美郡鳥取に生まれる。名は重生。通称は主善・礼造。城戸千楯に和歌・国学を学ぶ。鳥取藩医として京都に住み勤王の志士と交わる。明治維新後は、開拓使・太政官・宮内省に出仕した。没年不詳。

〔松田本生〕（26）

〔聚分韻略〕（二〇一七）

〔本生〕（19）

〔聚分韻略〕（二〇一七）

村岡良弼（一八四五―一九一七）

明治・大正期の法制学者。弘化二年（一八四五）下総国香取郡中村に渋谷義孝の次男として生まれた。名は良弼。字は賚卿。通称は五郎。号は櫟斎・麻園。水本樹堂に学んだ後、明治二年（一八六九）昌平黉明法科に入学する。刑部省・司法省に勤務し刑法沿革史や帝室制度史料の調査に与り、参事院書記生、議官補兼宮内省御用掛、内閣記録課長などを歴任、法制整備に尽力し明治二十五年に退官。その後は地誌研究に専念した。国史・地理・礼制・法令・器楽などに精通し、明治四十五年には六国史の校訂材料取調掛を委嘱された。大正六年（一九一七）没す。墓は東京都豊島区の染井墓地。著書に『法制志』『日本地理志料』等。

〔村岡氏印〕（30）

〔鹿嶋志〕（XI―五―C―七六）

〔村岡良弼〕（17）

\* 〔常陸紀行〕（XI―五―C―五五）

〔鹿嶋志〕（XI―五―C―七六）



山川端夫（一八七三—一九六二）

昭和期の国際法学者。明治六年（一九七三）山川景範の長男として西彼杵郡長崎に生まれる。長崎中学・第五高等学校を経て、明治三十一年東京帝国大学法科大学政治学科を卒業。海軍省に入省し海軍参事官・海軍大学校教授を務めた後、外務省に転じて条約局長などを歴任。大正十四年法制局長官。貴族院議員、外務省外交顧問などを勤めた。昭和三十年（一九五五）松浦史料博物館設立に尽力し初代理事長となる。昭和三十七年（一九六二）没。東京の谷中墓地に葬られる。国立国会図書館憲政資料室と東京大学社会科学研究所に関係文書が所蔵されている。東洋文庫では、昭和四十一年に寄贈を受けた外務省図書館旧蔵書中に、図書九八点を確認することができる。



- 〔山川〕（上）（12） 『御書鈔』（IV―四―F―e―一五） ほか
- 〔山川〕（下）（11） 『泰平年表』（X―五―A―一〇三二） ほか
- 〔山川蔵書〕（24） 『近思録』（III―一―八四九） ほか
- 〔山川端夫〕（20） 『脩身受用抄』（VI―六―一〇一〇） ほか
- 〔山川文庫〕（35） 『増補蘇批孟子』（I―八―E―八〇五） ほか
- 〔端夫〕（10） 『本化別頭佛祖統紀』（IV―四―F―e―一五） ほか





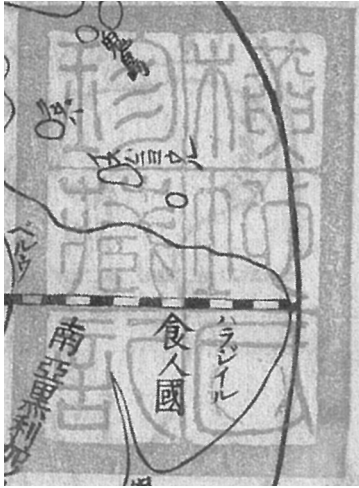
横地石太郎（一八六〇—一九四四）

明治・大正・昭和期の教育者。万延元年（一八六〇）加賀国石川郡金沢与力町に生まれる。金沢英学校、前田邸内学問所に学び、東京帝国大学理学部応用化学科を卒業。神戸師範学校教諭、京都府中学校教諭、鹿児島造士館教諭、福島県中学校長、松山中学校長などを歴任する。明治三十二年に山口高等学校教授に着任、のち山口高等商業校長となり、大正十三年（一九二四）に退職、名誉教授。昭和十九年（一九四四）京都市左京区の自宅で死去。

『靄隈文庫』（56）『増補華夷通商考』（XIII 五—C—c—一六）

『横地氏珍藏記』（62）

『増補華夷通商考』（XIII 五—C—c—一六）



横山由清（一八二六—一八七九）

幕末・維新期の国学者。文政九年（一八二九）塚越敬明の子として江戸に生まれ横山桂子の養子となる。諱は由清。通称は保三。号は月舎。本間游清・伊能穎則に国学を、横山桂子・井上文雄に和歌を学ぶ。国史典故、歌学に精通する。和学講談所の教授。維新後は昌平黌史料編修掛、大学中助教、制度局御用掛などを歴任、法律制度の調査研究に従う。明治八年（一八七五）元老院少書記官に進み、黒川真頼らと『旧典類纂』編纂に尽力した。晩年は東京大学法学部で日本古代法制史を講じた。明治十二年（一八七九）没。墓は東京の谷中墓地。著書に『歴朝政治沿革史』『貨幣度量權衡考』などがある。

「月の屋」(19)

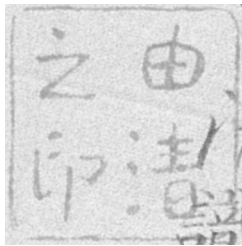
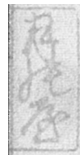
『日本国善悪現報靈異記攷証』(IV-四-A-10-1)

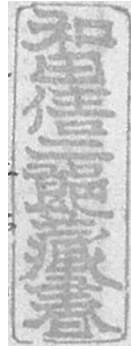
「習静堂記」(25)

『日本国善悪現報靈異記攷証』(IV-四-A-10-1)

「由清之印」(30)

『尚古図録』(X-五-K-100-1)





和田信二郎（一八七三—一九五〇）

大正・昭和期の郷土史家。明治六年（一八七三）和田義比の次男として小浜藩士の家に生まれる。祖父耘甫は敦賀郡奉行。叔父和田維四郎の薫陶を受ける。明治二十八年国学院を卒業し、奈良県立第一中学校に国語教師として赴任する。その後、古事類苑編纂所に移り、助修・校合員を勤める。ついで文部省に転じ、図書館に勤務して国語教科書検定に従事。昭和十八年辞官。昭和二十五年（一九五〇）没す。有識故実に関する史料が小浜市立図書館に収蔵されている。『君が代と万歳』『中川淳庵先生』等の著書がある。

掲出書は内藤堯宝旧蔵書。

「和田信二郎蔵書」（44）『嵯峨野之露』（X-15-A-1-137）

